

■ガーデンルネサンス

私は仕事のコンセプトに「ルネサンス」という言葉をよく使っている。

「ガーデンルネサンス」、「伝統園芸ルネサンス」そして、今年3月高松で行われるJFFかがわは「花ルネサンス」と名づけている。私のルネサンスは「庭」「花」「伝統園芸」といった「花・緑」で地域性や伝統文化、伝統工芸を復興しようというものだ。



江戸末期、すでに産業革命が起こっていたロンドンでは人口集中や不衛生な環境で多くの病気が発生していた。それに比較し、当時、世界の人口であった江戸の町は慎ましやかな循環型の清潔な町で、また野や、武家屋敷・路地の隅々まで花緑があふれる美しいガーデンシティであったと言われる。貧しく、慎ましい暮らしではあるが、花好きで、生き生き暮らす日本人を見て、「この国は世界で一番文化の高い国だ」とプランツハンターが書に残した。ヨーロッパのガーデニングブームや今、叔母様方が夢中になっているイングリッシュガーデンも、実はこの時代、日本から学んだ物だ。日本にあこがれた西洋人は多い。その中でもシーボルトはペリーが日本に開国を迫った時「暴力的な開国で、素晴らしい文化を持つ人々が住む美しい国・日本を壊さないでほしい」とペリーに手紙を書いたそう。美しい国は大砲にも勝つのである。

日本人は花と共に祝い事を催し、空間のしつらえ、インテリアまでそれに合わせて変え、四季の変化を楽しんできた。細やかな工芸品はそんなライフスタイルから生まれた。地方はその自然ポテンシャルを生かし、固有の文化や産業を生み出してきた。地域の自然はOnly Oneであり、それから生まれるものもOnly Oneである。先人は本当の意味の効率的ライフスタイルをおくっていたのだ。

明治以降、西洋が日本から学んだ物は共生のライフスタイル、西洋から日本が学んだ物は「経済効率」。結果、日本は経済的にも精神的にも荒れ果てた国になっている。そして、未だ本当の経済効率を認識している人はいない。

私のガーデンルネサンスとは日本人が切り捨てた日本の一番大切な部分を、花と緑で掘り起こし、美しい日本のふるさとの再生と創造を行おうというものだ。人間が生まれたときから付き合ってきた花と緑は様々な社会効果を持つ。感動、交流、健康、教育、環境(浄化、緩和)、研究開発、経済、私はこれを「花と緑の7恵」と言っている。これを生かし、江戸時代には戻れないが、江戸のライフスタイルに「賢さ」「粋」を学ぶ時が来ている。

辻本 智子 (株)辻本智子環境デザイン研究所代表取締役所長

【経歴】1985年大阪府立大学大学院農学研究科博士課程後期中退。
(株)AAP勤務、松下電器産業労働組合ユニットピアささやま花の植物館館長を経て1995年 (株)辻本智子環境デザイン研究所設立。

【主な仕事】兵庫県淡路夢舞台温室 奇跡の星の植物館。神戸空港旅客ターミナルビル建設工事植栽デザイン